

談話における「～てくれる」と「～てもらう」の習得
——タイ語を母語とする学習者を対象に——

Tewich SAWETAIYARAM

1. はじめに

本研究では、日本語能力が異なるタイ語を母語とする日本語学習者を対象に「～てくれる」と「～てもらう」の習得を明らかにすることを目的としている。日本語では、相手から恩恵行為を受けた際、相手に対する感謝の気持ちを表現すること、即ち「～てくれる」と「～てもらう」の使用が必要不可欠である。円滑なコミュニケーション及び人間関係を良好に保つために使用しなければならないのである。「～てくれる」と「～てもらう」を使用すべき箇所において使用しないと、相手に不快感を与え、人間関係が悪くなることが十分考えられる。

これまでの第二言語としての日本語の「～てくれる」と「～てもらう」に関する習得研究は多岐にわたる。しかし、多くの研究で採用されている調査方法は空欄補充形式テスト、作文テスト、文生成テスト(岡田 1997: 荒巻 2003: 稲熊 2004: 尹 2006)であり、談話における学習者の口頭データを分析対象とした研究は非常に少ない(大塚 1995: 田中 2001)。また、既存の研究における調査対象者のほとんどが英語、韓国語、中国語を母語とする学習者である。タイ語を母語とする学習者を対象に調査した研究は管見の限りではまだ見当たらない。

そこで本研究では、タイ語を母語とする学習者を対象にして、口頭データを収集し、「～てくれる」と「～てもらう」の使用実態を探る。

2. 授受補助動詞の習得に関する先行研究と本研究の課題

授受補助動詞(「～てあげる」、「～てくれる」、「～てもらう」)の習得に関しては、さまざまな言語を母語とする学習者を対象に研究がなされてきたが、主な先行研究をとりあげ、それらの問題点について指摘したい。

大塚(1995)では、JSL⁽¹⁾の日本語学習者(主に、英語、韓国語、中国語を母語とする学習者)がセリフのない20コマ漫画をみて話を描写するという口頭データを用いて「～てくれる」と「～てもらう」の使用を調査した。その結果、「～てもらう」が「～てくれる」より早く生成されていることが指摘された。

岡田(1997)では、JSLの日本語学習者(主に、英語、中国語を母語とする学習者)を対象とし、4ヶ月かけて作文のデータを収集した。その結果、①日本語能力が上がるにつれ、授受補助動詞が正しく使用できること、②談話の中では初級終了レベルでは「～てくれる」の使用回避と「～てあげる」の過剰使用の傾向が見られること、③中級前期・後期レベルでは「～てくれる」の無使

そして、調査対象者に関して述べると、ほとんどの研究は英語、韓国語、中国語を母語とする学習者を対象としている。他の言語を母語とする学習者がどのように「～てくれる」と「～てもらう」を習得するか記述した研究はまだ少ない。第二言語習得研究への貢献を考える際、他の言語を母語とする学習者を対象に調査を行い先行研究の結果と比較する必要がある。

このように、これまでの先行研究にはさまざまな課題が残っている。本研究では、上述した課題を踏まえ、次のように改良し調査を行うことにした。まず、「～てくれる」と「～てもらう」の発話データを収集する。そのために、4コマ漫画のオーラルナレーションを用いて調査を行った。次に、統計的な処理を行うことができるよう、調査対象者の数を多く収集した。また、これまで調査対象とされていない、タイ語を母語とする学習者を対象に分析する。これは、タイでの日本語教育現場への貢献にもなる。そして、本研究の課題は以下の3点である。

- I 正用における「～てくれる」と「～てもらう」の選択傾向は、日本語能力によって異なるか。また、日本語母語話者との間に差があるか。
- II 「～てくれる」或いは「～てもらう」を使用しなければならない場面では、その使用は日本語能力によって異なるか。また、日本語母語話者との違いが見られるか。
- III タイ語を母語とする学習者はどのような誤用を起こすか。また、熟達度によって誤用がどのように変化するか。

3. 日本語の「～てくれる」と「～てもらう」について

「～てくれる」における主語は「与え手」であり、話者の視点は非主語の位置にある「受け手」寄りである。一方、「～てもらう」における主語は「受け手」である。話者の視点は常にこの「受け手」寄りでなければならない。次の(1)、(2)はその例である。

(1)与え手 が 受け手 に ～てくれる(母がケーキを作ってくれた)

(2)受け手 が 与え手 に ～てもらう(母にケーキを作ってもらった)

4. 研究方法

4.1 調査協力者

調査は、63名のタイ語を母語とする日本語学習者(以下、JFL)を対象とした。63名は全員タイの同じ大学で日本語を専門として勉強している学部3年生と4年生である。JFLの熟達度に応じて、「～てくれる」、「～てもらう」の使用がどのように変わっていくか調査するため、本研究は「SPOT⁽⁶⁾」を使用し、JFLのレベルを中央値で上位群(以下、JFL上)と下位群(以下、JFL下)に分けることにした。その結果、JFL上は30名で、SPOT点数の平均値は52.00である。JFL下は33

詞「に」、「から」の区分は誤用の対象としない。また、収集した JNS の発話データも判断基準として扱い、JFL の発話を分析した。JFL の発話が JNS のデータにはない場合、3 年以上日本語を教授した経験がある日本人に正用かどうかを判断してもらった。

5. 結果と分析

5.1 各グループの「～てくれる」と「～てもらう」の選択傾向

まず、恩恵行為を受けた際、各グループは「～てくれる」を選択するか、或いは「～てもらう」を選択するかを検討する。ここでは、オーラルナレーションタスク 6 つに現れた「～てくれる」と「～てもらう」の正用を対象にした。表 1 は、各グループが発話データの中で使用した「～てくれる」と「～てもらう」の頻度を示したものである。表中の括弧内の数字は全体の使用における使用率を表す。各グループにおける使用率を図で示したのが図 1 である。

	～てくれる	～てもらう	総数
JNS	29(37.18)	49(62.82)	78(100)
JFL 上	27(56.25)	21(43.75)	48(100)
JFL 下	18(69.23)	8(30.77)	26(100)

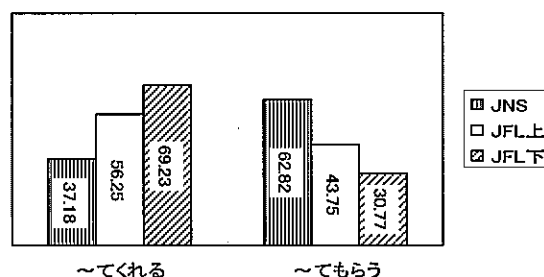


図 1 各グループにおける使用率

これらの図表から以下のような傾向が読み取れる。まず、JNS は「～てくれる」、「～てもらう」を一番多く使用している。その次に、JFL 上、JFL 下の順である。日本語能力が低いほど、使用が少なくなることが推測できる。次に、JNS は「～てもらう」を多く使用しているのに対し、JFL 両グループは「～てくれる」を多く使用している。特に、JFL 下はこの傾向が強い。そして、「～てくれる」或いは「～てもらう」の選択が等確率(ランダム)に起こるかどうかを検討するために、カイ二乗分布を使った一様性の検定を行った。表 2 はその分析結果である。

一様性検定の結果	
JNS	$\chi^2(1)=5.128, p<.05$
JFL 上	$\chi^2(1)=.750, n.s.$
JFL 下	$\chi^2(1)=3.846, p<.05$

表 2 から明らかなように、JNS では、恩恵行為を受けた際、「～てもらう」を選択し使用する傾

向があり、一方、JFL 下は JNS と反対に「～てくれる」の方を多く選択し使用する傾向があることが分かる。しかし、JFL 上になると、その傾向が見られなくなった。熟達度が上がると、「～てくれる」のみならず、「～てもらう」も使用しているが、「～てくれる」と「～てもらう」の使用の差は見られない。

次に、「～てくれる」或いは「～てもらう」を使用しなければならない場面では、その使用が日本語能力によって異なるかを検討する。ここでは、JNS が「～てくれる」或いは「～てもらう」を 80%以上使用した箇所のみを対象に調査を行った。その理由は、恩恵の行為を直接的に受けていない場合、JNS でも必ず「～てくれる」或いは「～てもらう」を使用するとは限らないからである。次の(3)と(4)はその例である。

(3)もう部屋の中が めちゃくちゃに荒らされてて あの～これはぜったい 空き巣かな～
 と思って もう急いで警察に電話して で来てもらって(JNS26)

(4)すごいびっくりしちゃった で 警察に電話して 多分泥棒が入ったんじゃないかな～
 って 言っておいたよ(JNS9)

(3)と(4)のように、JNS における「～てくれる」或いは「～てもらう」の使用が少ない箇所を調査対象にすると、その絵が本当に「～てくれる」或いは「～てもらう」を調査するために適切であるか疑問が残る。また、結果にも影響を及ぼす可能性がある。そこで、本研究では JNS が「～てくれる」或いは「～てもらう」を 80%以上使用した箇所のみを対象に調査を行った。その結果、2つあることが分かった。表 3 は、その 2 つの絵の中で各グループの「～てくれる」或いは「～てもらう」の使用頻度を示したものである。「その他」は、「～てくれる」或いは「～てもらう」の誤用およびその他の表現を表す。表中の括弧内の数字は全体の使用における使用率を表す。各グループにおける使用率を図で示したのが図 2 である。

表 3 各グループによる「～てくれる」

或いは「～てもらう」の使用			
	「～てくれる」		
	「～てもらう」	その他	総数
JNS	59(98.33)	1(1.67)	60(100)
JFL 上	39(65)	21(35)	60(100)
JFL 下	19(28.79)	47(71.21)	66(100)

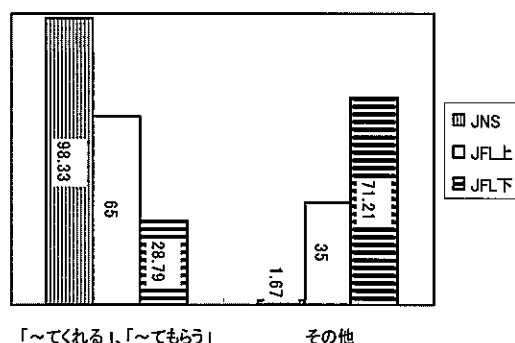


図 2 各グループにおける使用率

これらの図表から以下のような傾向が読み取れる。JNS が「～てくれる」、「～てもらう」を多く使用している絵においては、JFL の日本語能力が低いほど、使用が少なくなることが推測できる。そして、ここで独立性の検定を行い、グループと「～てくれる」或いは「～てもらう」の使用の関係を検討した。表 4 はその分析結果である。

表 4 「～てくれる」或いは「～てもらう」の使用結果

独立性検定の結果	
JNS 対 JFL 上	$\chi^2(1)=22.263, p<.001$
JNS 対 JFL 下	$\chi^2(1)=64.457, p<.001$
JFL 上対 JFL 下	$\chi^2(1)=16.590, p<.001$

独立性の検定で、JFL 上と JFL 下の使用の間に有意差が見られた。この結果から、日本語能力が上がることにより、「～てくれる」或いは「～てもらう」を使用しなければならない場面において正確に使用できるようになると考えられる。しかし、JNS と JFL 上、JNS と JFL 下の「～てくれる」或いは「～てもらう」の使用を検討すると、いずれも有意であることが分かった。これらの結果から、日本語能力が上がり、使用すべき場面において使用できるようになってもまだ十分に理解しておらず、JNS との間に差があることがうかがえる。

5.2 JFL が起こした誤用

図 2 から明らかなように、JFL 上と JFL 下は「～てくれる」或いは「～てもらう」を使用すべき箇所において「～てくれる」或いは「～てもらう」の誤用を起こしたり、他の表現を使用したりした。ここでは、具体的には JFL はどのような誤用を使用したかを分析した。分析対象は、JNS が「～てくれる」或いは「～てもらう」を 80%以上使用したオーラルナレーションタスクの絵のみである。その結果、JFL の誤用は以下の 2 つの傾向があることが分かった。

1. その文脈では「～てくれる」或いは「～てもらう」が必要であるが、使用されていない、いわゆる「無使用」
2. 「～てくれる」或いは「～てもらう」を使用してはいるが、形式や助詞の間違いでオーラルナレーションの絵の内容と異なる内容になる「形式・助詞の誤用」

次の(5)、(6)は「無使用」の例で、(7)、(8)は「形式・助詞の誤用」の例である。(→)は筆者による訂正である。

(5)お母さんが ケーキを 食べたら 美味しいと 私を 褒めました(JFL 上 16)(→私を褒めてくれた)

(6)お母さんが え～ これは このケーキが 美味しいわ と 言ったが 私はすごく え～ 何か 嬉しかった(JFL 下 23)(→お母さんが言ってくれた)

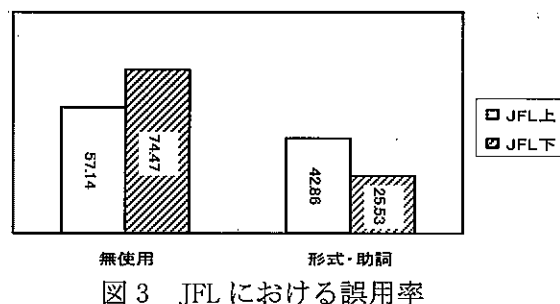
(7)指を 噛まれ～ て 大 泣きしちゃった 家 家に かえ 帰ってから 母に 怪我を治してくれ ました(JFL 上 10)(→母が治してくれました)

(8)家に帰ったら 母 母～ に 怪我を な 怪我を なおせました(JFL 下 9)(→母に治してもらった)

表 5 は、JFL が起こした誤用数を示したものである。表中の括弧内の数字は全体における誤用率を表す。各グループにおける誤用率を図で示したのが図 3 である。

表 5 各グループによる誤用

	無使用	形式・助詞	総数
JFL 上	12(57.14)	9(42.86)	21(100)
JFL 下	35(74.47)	12(25.53)	47(100)



日本語では、話者が恩恵行為の受け手である場合、円滑な人間関係を確立・維持するために「～てくれる」或いは「～てもらう」を使用しなければならない。しかし、JFL 両グループの中で最も多く観察されたのは「無使用」である。これらの表現を付加せずにそのまま表現してしまうと、JNS にとっては配慮に欠けた失礼ともとれる言い方に聞こえてしまう。学習者にこの点を意識化させる必要がある。しかし、日本語能力が上がると「無使用」が少なくなってきた。日本語能力が上がると「～てくれる」或いは「～てもらう」が必要な文脈において、使用しなければならないことを理解していることがうかがえる。

「形式・助詞の誤用」に関しては、形式の誤用(授受補助動詞の代わりに「使役表現」を使用した場合(例 8)、「～てくれる」の代わりに「～てあげる」を使用した場合もあるが、最も多かったのは「助詞の誤用(例 7)」である。

授受補助動詞は恩恵という意味を示すためだけではなく、方向性を明示するためでもある(庵・

高梨・中西・山田 2000)。そのため、助詞を間違えて使用してしまうと、聞き手は当然異なる理解をしてしまう。また、「助詞の誤用」が「無使用」と異なり、JFL 上になっても多く残っている誤用である。JFL 上にフォローアップインタビューを行った結果、「助詞には気をつけていない」、「恩恵の気持ちを表すためには『～てくれる』或いは『～てもらう』を付加すれば十分だと思っていた」などを答えた。JFL 上は「恩恵」を「～てくれる」或いは「～てもらう」と結び付けてしまうが、形式に注意を払いすぎたせいか助詞のことをほとんど考慮していない。助詞を間違えて使用してしまうと、異なる解釈になることを学習者に指導する必要がある。

6. まとめと今後の課題

本研究では、日本語能力が異なるタイ語を母語とする日本語学習者を対象に「～てくれる」と「～てもらう」の習得を検討した。その結果、以下のことが明らかになった。

- I 「～てくれる」と「～てもらう」の選択傾向は、日本語能力によって異なる。また、JFL 下は「～てくれる」を多く用い、JNS の「～てもらう」を多く使用していることと異なる。
- II 「～てくれる」或いは「～てもらう」を使用しなければならない場面では、その使用は日本語能力が上がると進むが、JFL 上になっても JNS との間に差が見られる。
- III タイ語を母語とする学習者は「無使用」と「形式・助詞の誤用」を起こした。レベルが上がると「無使用」は少なくなるが、「形式・助詞の誤用」は多く残る。

今後の課題としては、まず、話者が恩恵行為に関わる場面と関わらない場面を併せて調査しなければならないことである。今回の結果では、話者がその恩恵行為の受け手であることを限定し、「～てくれる」と「～てもらう」の使用を調査した。しかし、尹(2004)で指摘されたように、話者がその恩恵行為の受け手であるかどうかによって結果が異なる可能性が考えられる。話者が恩恵行為に関わらない場面を調査し、今回の結果と比較しなければならない。次に、今回は JFL の「～てくれる」と「～てもらう」の使用を中心に分析した。しかし、JNS の使用では、「～てくれる」或いは「～てもらう」が多い場面とそうではない場面がある。これらの場面の違いはどこにあるかを明確にすることができれば、指導する際に役立つと考えられる。

注

- (1)JSL は Japanese as a Second Language の略語である。
- (2)無使用とは、意味の誤りがあるのではなく、その箇所において授受補助動詞を使用していないために表現に適切さを欠いていることを意味する(堀口 1984)。
- (3)OPI(Oral Proficiency Interview)とは、ACTFL(American Council on the Teaching of Foreign Languages)によって開発された、テストと被験者が一対一で行う、最長 30 分の会話能力テストである。

(4)KY コーパスは英語・韓国語・中国語話者各 30 名(初級 5 名、中級 10 名、上級 10 名、超級 5 名の 4 レベル)で、計 90 名の被験者と日本人テストのインタビュー会話からなるデータである。

(5)JFL は Japanese as a Foreign Language の略語である。

(6)SPOT は Simple Performance-Oriented Test(日本語能力簡易試験)の略語である。

参考文献

荒巻朋子(2003)「授受文形成能力と場面判断能力の関係―質問紙調査による授受表現の誤用分析から―」『日本語教育』第 117 号、日本語教育学会、pp.43-52

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』、スリーエーネットワーク

稲熊美保(2004)「韓国人日本語学習者の授受表現の習得について―「もらう」系と「くれる」系を中心に―」『国際開発研究フォーラム』第 26 号、pp.13-26

大塚純子(1995)「中上級日本語学習者の視点表現の発達について―立場志向文を中心に―」『言語文化と日本語教育水谷信子先生退官記念号』第 9 号、pp.281-292

岡田久美(1997)「授受動詞の使用状況の分析―視点表現における問題点の考察―」『平成 9 年度日本語教育学会春季大会予稿集』、pp.81-86

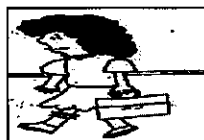
田中真理(2001)「日本語の視点・ヴォイスに関する習得研究：英語、韓国語、中国語、インドネシア語・マレー語話者の場合」国際基督教大学博士学位論文

堀口純子(1984)「授受表現にかかわる誤りの分析」『日本語教育』第 52 号、日本語教育学会、pp.91-103

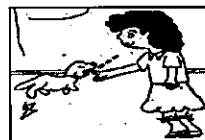
尹喜貞(2004)「第 2 言語としての日本語の授受動詞習得研究概観」『第二言語習得・教育の研究最前線―2004 年版』日本言語文化学会、pp.168-181

尹喜貞(2006)「授受補助動詞の習得に日本語能力、及び学習環境が与える影響―韓国人学習者を対象に―」『日本語教育』第 130 号、日本語教育学会、pp.120-129

資料 オーラルナレーションタスク



1 コマ



2 コマ



3 コマ



4 コマ

用⁽²⁾が多く見られることが報告された。

田中(2001)では、JSLの英語、韓国語、中国語を母語とする学習者のOPI⁽³⁾を文字化したKYコーパス⁽⁴⁾を使用し、「～てくれる」、「～てくださる」、「～てもらう」、「～ていただく」の習得状況を調査した。その結果、①初級レベルでは学習者の母語に関わらず授受補助動詞が現れていないこと、②英語を母語とする学習者の中には、中級レベルに達しても、授受補助動詞が正しく使用できず、無使用及び誤用のみを産出する学習者がいること、③「～てくれる」が「～てもらう」より早く生成されていることが報告されている。

荒巻(2003)では、中上級クラスのJSLの学習者(主に、英語、韓国語、中国語を母語とする学習者)に対し、質問紙を使用して学習者の授受補助動詞の形成能力と場面判断能力の関係を調べた。その結果、学習者は授受補助動詞を形成する能力を持っていても、それらを使用すべき場面では適切な判断ができるとは限らないと指摘している。

稲熊(2004)では、韓国語を母語とする学習者(JFL⁽⁵⁾)69名にOPIを行い、4つのレベルに分け、多肢選択試験(「～てくれる」、「～てくださる」、「～てもらう」、「～ていただく」)を行った。その結果、韓国語を母語とする学習者は、「～てもらう」及び「～ていただく」の方が「～てくれる」と「～てくださる」より習得には時間がかかることが明らかになっている。

尹(2006)では、日本語能力及び学習環境が異なる韓国語を母語とする学習者を対象に、文産出テストで授受補助動詞の習得状況と、学習者と日本語母語話者の「～てくれる」、「～てもらう」の選択傾向を調査した。その結果、「～てくれる」、「～てもらう」の選択の傾向は、JFL学習者では日本語能力によって異なり、日本語能力が低いレベルでは学習環境によって異なることが分かった。また、日本語母語話者は「～てもらう」を多く使用するのに対し、レベルの低いJFL学習者は「～てくれる」をより多く用いることも分かった。

ここに述べた先行研究例から分かるように授受補助動詞の習得に関する研究は多数存在する。「～てもらう」の方が「～てくれる」より習得しやすいという結果もあれば、「～てくれる」の方が習得しやすいという結果もあり、授受補助動詞の習得順序に関して未だ一致した見解は示されていない。また、これまでの先行研究には以下のような課題が残っていることも否めない。

まず、調査方法について述べる。大塚(1995)、田中(2001)を除き、ほとんどの研究は文生成テストか多肢選択試験を用いて調査したものである。実際の場面で学習者が本当に授受補助動詞を使用することができるのか判断が難しいことが指摘できる。

次に、データ記述の問題について述べる。大塚(1995)では、英語、韓国語、中国語を母語とする学習者を対象に調査を行い使用率を提示したが、分析した際母語別にデータを記述していない。そのため、得られた結果がある言語を母語とする学習者による過剰使用である可能性が否定できない。また、各母語の調査対象者数も少なく、統計的な処理も行われていない。そのため、結果を一般化することが難しい。この点については、岡田(1997)にも見られる課題である。

名で、SPOT 点数の平均値は 35.97 である。調査期間は 2006 年 2 月から 3 月までである。また、フォローアップインタビューにより、彼らは全員日本に留学した経験がないことが判明している。そして、ベースラインデータとして日本語母語話者のデータを収集した。調査は、30 名の日本語母語話者(以下、JNS)を対象とした。この 30 名は言語学及び日本語教育を専門としない大学院生で、タイ語を話せない対象者である。

4.2 調査方法

本研究が使用した調査方法は、オーラルナレーションタスクとフォローアップインタビューであった。オーラルナレーションタスクは 4 コマ漫画から構成されたタスク、計 6 つである。その 1 つを本論文の末尾に提示する。全ての 4 コマに 1 人の黒い髪の主人公が現れ、恩恵行為を受け、さまざまな出来事を体験していく。調査協力者に、絵の中の出来事は先週自分が主人公として体験した出来事であり、その出来事を何も知らない友達に詳しく話すよう指示した。

そして、調査終了後すぐ、調査協力者全員にフォローアップインタビューを行った。調査協力者の授受補助動詞の理解と判断基準を確認するためである。

4.3 調査の場所

JFL の場合、ほとんど大学のロビーで調査を行った。調査者が大学の外部の人間であるため、教室を使用することができず、学習者のくつろげる場所として大学のロビーを選択した。一方、JNS の場合、個室(大学の教室)で調査を行った。

また、調査者と調査協力者との距離は常に 1 メートル以内とし、2 人とも椅子に座り、調査協力者側に IC レコーダー(OLYMPUS Voice-Trek V-50)を置いて、調査を行った。

4.4 分析対象と分析方法

実際にデータを収集した際、JNS は JFL と異なり、指定した絵の内容だけでなく、自分の想像で話を作り、漫画中に現れてはいないが「～てくれる」と「～てもらう」を使用することがあった。JNS が発話したすべての「～てくれる」と「～てもらう」を統計処理の対象にしてしまうと、JFL のデータを比較する際、JFL の「～てくれる」と「～てもらう」の使用実態を探ることができないと考えられる。そこで本研究では、漫画中に指定した「～てくれる」と「～てもらう」の箇所のみを分析対象とした。また、言い直しがある場合、言い直したもののみを分析対象とした。本研究では、統計処理の対象は正用のみとし、カイ二乗検定で各グループの有意差を検証した。

正誤判断に関しては、「～てくれる」と「～てもらう」における与え手と受け手の位置付けを正確にとらえているものを正用とする。格助詞の正しくないもの(例: 母は私に手当てをしてもらった)、他の形式が使用できないが使用してしまったものは誤用とする。ただし、行為者を表す各助